

ドン・バス炭坑区の「労働宮」

——ソヴェト同盟の労働者はどんな文化設備をもっているか——

宮本百合子
青空文庫

世界の経済恐慌につれて、日本でも種々の生産（製糸、紡績、化学、運輸等）が低下し、それにつれて燃料原料となる石炭は二割七分の生産減を見た。北九州地方の炭坑労働者の生活などはこの頃以前にましてひどい有様になつて来ている。（賃銀は一日平均十時間労働で一円五六十銭やつとだ。恐慌前から見ると二十銭以上引下げ）

これは北九州の或る坑山で実際にあつた話であるが、或る坑山が所謂事業不振で閉鎖されることになった。会社の方では儲がうすくなつたから、これ以上損をすまいと勝手に閉めるのだが、その日から女房子供を抱えて路頭に迷わなければならぬ数百人の労働者達は、黙つてそうですかと引込んではおれない。かたまつて事務所へ押しかけ、閉めるのは勝手だが、俺たちの命がつなげる方法を講じろと迫つた。会社ではあわてて、一策を案じ出した。それは、失業させられた労働者中の希望者は県当局がいくらかと会社がいくらかと旅費を補助して「満州国」へ移住させるというのだ。

会社の事務員は「満州国」へ行きさえすれば仕事は山ほどあり、物価はやすいし仕合わせずくめの話をする。ブル新聞では「新天地満州国」とか、日本の「大衆の幸福の鍵満州国」という風な太鼓をたたいているから、失業させられ、食う道を求めて焦つている労働

者たちは到頭心を動かされた。僅かの旅費の補助を土台とし遠い満州国へ移住するのだからと家財道具をも売り払って、女房子供を引きつれ数百人が一団となつて幸福を求める旅立つて行つた。

長春は新京と名を改め、今は「満州国」の首府である。着いて見て、北九州の労働者達は拳を握つて口惜しがつた。会社と県当局とに、一杯くわされたことがわかつた。「満州国」の役人は職業の世話をしてくれないばかりか、テンから邪魔者扱いである。「こつちにはお前らよりもっとやすい賃銀で働く中国の労働者がいくらでもいるから用はない」そういう云つて放り出された、とり合つてくれぬ。

「満州国」がわれわれ大衆の暮しをよくする役に立つというようなブルジョア・地主政府の云い草は嘘である。中国を植民地として、中国の労働者を一層やすい賃銀で搾り、ブルジョア・地主が大衆を抑圧する力を強めようとしているばかりである。そういう事実が労働者たちに分つた。人間なみの生活を求めて行つた「満州国」でも労働者が得たものは「飢餓」と失業とである。

困り切つた北九州の労働者の大部分は故郷へ又戻つて來た。出立の時よりもつともつと無一文になり、殆ど乞食姿で戻つた。「満州国」から帰る旅費はどこからも補助されなか

つたのである。

この話をきいた時、私の心にきつく浮んだ一つの活々した絵がある。それはソヴェト同盟の炭坑労働者の生活の有様である。

一九二八年の初秋（五ヵ年計画の始る前年であつた）私はドン・バス炭坑区の中心ゴル口フカを見学した。五ヵ年計画によつてウラル地方にも大きい炭坑区が出来たが、それまではドン・バス炭坑はソヴェト同盟最大の石炭宝庫であつた。ソヴェト同盟では、諸君も知つているとおり、世界の労働者農民の見学団を心から歓迎している。石炭の町ゴル口フカにも、ドイツ、アメリカ、イギリスなどの工場や農村の職場大衆から選ばれて見学に来たもののために、また作家や技術家が見学や研究に来た時のために、特別な「訪問者の家」というのがある。

このゴル口フカ炭坑の革命までの主人はフランスのブルジョアであつた。が、今はソヴェト同盟の革命的なプロレタリアが主人で、社会主義の社会を建設するために日夜努力をしている。炭坑事務所の壁には赤い布に「工業化！ 電化！ プロレタリアの勝利はこれだ！」と白字で書いたプラカードが貼られ、一週間ずつの採炭高と生産計画とを対照した興味ある統計図がかかげられている。経営主任の責任ある位置にいるひとはやつと三十そ

ここまで、その辺にいる誰彼と一向違わない鳶色のルバーシカを着、元気に仕事をやってる。鞄を小脇に抱えた連中が盛に出入りする、青い技師の制帽をかぶったのも来る。主任は日本の女がモスクワから遠い炭坑を見学に来たのを珍しがつて忙しいにもかかわらず、「あなたはどうしてドン・バスを見学する気になつたんですか?」と私に向つて訊いた。私はありのまま答えた。

「私は石炭について専門的なことはちつとも知らないのです。けれども、私はソヴェト同盟へ来てからいろいろな工場を見学して、社会主義の国の工場とはどういうものか、そこで労働者はどんなに生活しているかということを見た。成程、人間は社会の仕組みによつてはこうも暮せるのだということが分つた。日本はブルジョア国だから工場もひどいが、炭坑は話のほかです。危険の中で獣のように搾られている。ソヴェト同盟の炭坑の労働者の生活はどんなか、それが見たかったのです」と云つた。すると、主任は、

「それは結構だ! すつかり見て下さい。ドミトロフ君、君このひとを案内してあげてくれ給え」

そう云つたが、急に私の方を振りかえり、

「ああ君、坑内へ入りますか？」
と云つた。

「よかつたら入れて下さい」

念のために断つておくがソヴェト同盟では、婦人の地下労働は一切禁じている。ドン・バスに何千と婦人労働者がいるがそれは選炭その他みんな地面の上での仕事をやつているのだ。

私は同志ドミトロフにつれられて、先ず大仕掛けの動力室発電所へ入つて行つた。坑内の換気のため、エレベーターやトロを動すために、動力室では五人の熟練工が絶えず働いているが、感服したのはその安全装置である。唸つて震えている、巨大なモーターの周囲は油さしやその他にごく必要な部分だけを露出して強い金網で覆つてある。調帶も、万一はずれた時下で働いている者に怪我させそうな場所は鉄板の覆いがかかつている。

更衣所で、男の着る作業服に着かえ、足先を麻の布でくるんで膝までの長靴をはいた。すっぽり作業帽をかぶつて待つていると、自分も作業服にかえてドミトロフ君がやつて來た。そして、

「ホホー」

と思わず笑い出した。私も笑つた。というのは私は日本の女の中でも体が小さく丸く五尺に足りない。それがソヴェト同盟の大きい男の作業服を着たのだから、手先はだぶだぶだし、靴はぶかぶかだし、子供の化物のような恰好なのだ。

「工合がわるくないですか？」

ドミトロフ君は心配氣だ。

「平氣です。出かけましょうか」

「配燈室」へ入つて行くと、丁度今交代で坑内へ下りようとする多勢の労働者が順々に安全燈をとりに来ている。我々一行もその列に並んで窓口から掛の婦人労働者に電気安全燈を貰つた。

「配燈室」の入口の廊下から、みんなが列をつくつている場所の壁まで、うまく注意をひきつけるように傷害予防のポスターが貼りまわされている。

「注意！ 注意！ 命をすてるな」坑内へすてたタバコの吸殻からガス爆発をする絵が描いてある。

「注意！ 同志たちよ、機械の力を理解して！」電気トロに油断すると、やつぱり命を失うぞ。不具になるぞと絵で示してある。安全燈をうけどる間に、毎日のことながら新しい

注意をよび起すようにしてあるのだ。

「注意！ アルコールはわれわれの敵だ！」酔つて坑内へ下りようとし、エレベーターに挟まれて死ぬな。なかなか真に迫った絵が描かれている。

「注意！ 骨を惜しむな！」小さい支柱の故障だと云つて放つて置くな。落盤はいつ起つて君らを圧死さすかもしね。

ソヴェト同盟の炭坑では労働者がどんなに作業の危険を防ごうと互に注意しあっているかがありありと感じられた。このポスターを見ただけでも、会社が搾るために労働者をシキに追い込む炭坑と、労働者が自分らのために働いている炭坑との根本的な相違が現れている。（こういうみなのためになるポスターなどはソヴェトのプロレタリア美術家同盟の画家たちが描いているのだ）

同じような注意は地下数百米の坑内にも及んでいる。見張所は応急救援所をかねている。二時間ばかり泥水と炭塵にまびれて上つて来ると、ドミトロフ君は私を風呂へ案内した。よそから来たものだけを入れる体裁の風呂ではない。みんな一日七時間——八時間の労働をしますと、風呂で体を洗つて家へ帰るように設備が出来ているのだ。

「訪問者の家」はすっかり家族的なやりかたである。寝室が別なだけで食事でもお茶でも

来合わせている者が食堂へ集つて談笑しながら賑やかにたべる。夕飯のときは、ソヴェト同盟における炭坑の経済状態研究のためにレーニングラードから来ている学者が面白い話をして皆をよろこばせた。学者と云つても、書斎にだけこびりついて青ざめている学者ではない。彼は十月革命の当時、レーニングラードの鋳鉄工場にバリケードを築き銃を執つてプロレタリア解放のために闘い、後赤軍にいたことのある闘士である。

夕方七時頃、われわれは再び「訪問者の家」を出かけた。秋のことだから、四辺はすっかり暗い。黄葉した樹の葉と枯れ始めた草の匂いがガス燈に照らされた道に漂つてている道が原っぱのようなところにひらけた。先に立つて歩いていたドミトロフ君が、

「鉄道線路があるから、つまずかないよう！」と注意した。暫く行くと草に埋もれて、複線のレールが古びている。これは又何故か？ 私は不思議に思つた。すべてのものを役に立てるソヴェト同盟の労働者がどうしてレールを腐らしているのだろう？

ドミトロフ君のその時の答えは、今日も猶つよく私の心にのこつてゐる。この二条のレールの走る地点こそ、ゴルコフカすべての労働者にとつて忘られぬ記念の場所なのであつた。一九一八年の国内戦のとき白軍が装甲列車をころがしてドン・バスを占領しようと攻

撃して來た。ゴルロフカの革命的労働者は社会主義社会建設のためにこの豊富な炭坑区がどんなに大切な意味をもつものであるかということをはつきり知り命をもつて守る決意をした。ここから三四哩マイル先の地点にかけて最後の激戦が行われ、百七十余人の前衛労働者の血が流された。そして遂に白軍を炭坑区から追い払つた勝利を記念するレールなのであつた。

夜の原っぱを横切つて、あつちからも、こつちからも三々五々男女の労働者がやつて来る。彼方には夜目に白く堂々と巨大な丸天井をもつた建物が浮び上つてゐる。「労働宮」へ遊びや勉強にゆく労働者たちだ。

白い石の正面大階段を登ると、どつしりした鉄の扉の片翼が開いてゐる。入つたところはやはり白い滑らかな石をしきつめた大広間だ。天井から新式な大電燈が煌々と輝いて、今あんな原っぱの夜道を通つて來たということが信じられぬような印象を与える。小ざつぱりした平常着姿で本をもつたりギターをもつたりしている男女労働者に交つて廊下へ出ると、つき当りは大舞台の入口だ。

「——今日は生憎何もやつていませんが……」ゴルロフカの労働者とその家族が無料で見物するために映画や芝居、音楽会、講演会などがこの大舞台で行われるのだ。薄暗い内部

を見わしたところ、二階まで坐席があつてなかなか大きい。モスクワに鉄道従業員組合クラブがあり、そこの舞台は数多いソヴェト同盟の労働者クラブの中でも立派なものとされているが、そこより多数入れそうだ。私はぐるりと見まわしながら、

「何人ぐらい入れるのでしよう」

ときいた。

「六百人はゆつくりです」

ドミトロフ君も満足そうに自分達労働者の力で建てた舞台を眺めていたが、やがてつけ加えて云つた。

「この舞台は実に役に立ちますよ。われわれはここで映画や芝居を観てたのしむばかりではない。ソヴェト選挙もここでやるし、新経済年度の眞面目な討論会も各坑の代表が集つてここでやる。楽しみの場所であり、真剣な仕事場もある。——つまりわれわれの建設の両面がここにあるわけですね」

もう半月ばかりすると、この演劇サークル上演の芝居が見られるのだそうだ。ドイツの新式な電気照明装置が舞台についている。

元の廊下をゆくと、右や左にいくつもの室が並んでいる。真先に目につくのは「レーニ

ン主義共産青年同盟」 「地区委員会（赤色労働組合）」 「全同盟共産党・ボルシェビキ」とそれぞれ高く入口に札をかかげた部屋部屋だ。その先に図書室がつづいている。ドミトリオフ君が静にドアをあけたところから内部を見ると、中央の大テーブルをかこんでいろいろの雑誌を数人の男女が熱心に見てる。テーブルの程よいところに眼の衛生を重んじた緑色のカサの卓上電燈が配置されてる。別に独立した小テーブルがいくつかあって、そこではわきに手帖をひろげ、何か専門的な書籍で勉強している人々がある。レーニンの石膏像がこの落着いて知識を吸い込んでるソヴェト同盟の労働者の姿を見下しててる。

二十人ばかりの音楽サークルでは男女混声合唱の稽古最中だ。さつき入口で会ったギターをかかえた若い男が指導者で、

「ホラ、そこをもつと強く！ つよく、早く、愉快に！」

とやつててる。若々しく楽しい歌声はドアをしめて廊下へあふれてきこえる。その歌声をききながら、向い合いの室では「新聞」編輯だ。一人がルバーシカの襟をひらいて一生懸命モスクワ発行の『プラウダ』から何か論説をやさしく大衆向きに書き直しててる。鋏で切抜きをやつててる若者がある。漫画の切抜きを集めたのを調べててるのもある。

諸君はこれまでソヴェト同盟の労働者、農民、勤人、赤軍兵士すべてが、自分たちの

工場、農場または職場の新聞を発行しているという話をきいたことがあるだろう。工場新聞は大抵印刷で大版四頁、六頁という本式のものだ。工場新聞では『プラウダ』をはじめ、労働組合の機関新聞などがソヴェト同盟全体の建設問題としてとりあつかう政治、経済、文化すべての問題を、自らの工場ではそれがどんな風に扱われているか、実際の状態はどうか、どんな労働者大衆のイニシアチーブがあるかという点などを書く。自己批判もある。大衆的投書もある。文学サークルの連中の詩や小説ものる。

職場の新聞は、印刷の工場新聞をもつてゐる工場でも各職場職場が手書きの壁新聞の型で発行している。五時間毎にかわる。これは、ほんとに職場の新聞で、職場の日常的なあらゆる感想、自己批判を、洒落ででも、滑稽な色紙の切抜きをはりつけてでも、新聞からの切抜きを利用してでも、ごく自由に大判画用紙一枚ぐらいにまとめて、そのままピンで職場の壁にはりつけ、皆で読む。

ゴルロフカは炭坑だから、地べたの下何百メートルのところまで職場新聞はもち込めない。ここではゴルロフカ全体の新聞が出されているわけなのだ。ドミトロフ君が説明して『プラウダ』の論文を書き直している若者が「われわれの新聞の編輯責任者の一人ですよ」。

と云つた。青年労働者はその声で鉛筆をもつたまま顔を上げ、丈夫そうな美しい歯なみを見せて笑つた。「そして『共産青年同盟プラウダ』の通信員です」

私はきいた。

「坑内で働いているんですか?」

ソヴェト同盟では十八歳以下の青年労働者は一日六時間以下、十六歳以下は四時間以下しか労働を許さない。それで八時間労働に同じだけの賃銀をとり、しかもその半分だけの時間は勉強のためにつかわれるのだ。コーリヤというその青年労働者は、

「働いています」

と答えた。

「だが坑内で働くのはたつた三時間か四時間です、僕は今専門学校の講義クラスに出てるので、坑内はそれだけなんです」

ほほう、ここには専門学校まであるのか! 訊いて見たら学校はまだ建っていないがゴルロフカ炭坑に働いている専門技術家が教師となり、半年、一年、二年とそれぞれ程度の違う技術教育を行い、プロレタリアの幹部、指導者を養成しているのだ。

ここで朝鮮、台灣の読者諸君に特別に知らせたいことがある。それは、ゴルロフカの

「労働宮」にはロシア語の工場新聞のほかにもう二つ別にユダヤ語とタタール語の小新聞発行所が設けられていることだ。十月革命によつてプロレタリア農民が勝利するまで、ブルジョア地主の專制支配の下でユダヤ民族と弱小民族の一つであるタタール民族が虐げられて来たことは、ロシア歴史を一目見ただけで明らかである。ユダヤ人は屡々虐殺された。タタール人抑圧の悲憤にみちた物語は、文豪のトルストイも小説に書いている。帝政時代のロシア支配階級はその他多くの弱小民族を圧迫し生活権を奪うことによつて豊沃な耕地を、森林を、鉱山と港とを自分の富として加えた。タタール民族ユダヤ民族は、自分らの言葉で書いたり読んだりすることさえ禁じられていた。小学校は強制的にロシア語で教えた。公文書は必ずロシア語でなければ通用せず、芝居も自分らの言葉でやることは許されなかつた。誰にでもわかる自分らの言葉で本を出版することなどはもつての外のことであつた。

「十月」とソヴェト権力の確立、プロレタリア独裁とが初めて、この屈辱的な民族的差別を根本から廃絶した。民族は完全に独立した。自治共和国をもつようになつた。今日では自由に自分の国の言葉で読み書きは勿論演劇もやる。学校教育もやる。出版される。「労働宮」の大きくない一室のドアの上に貼られた「ユダヤ語、タタール語新聞発行所」とい

う紙は小さいものだ。しかし、それは世界幾千万のプロレタリアの「植民地独立！」と叫ぶ声である。

ところで「労働宮」の半地下室へ降りて行つて見て私はびっくりした。これはさながら最新式の欧洲航路の汽船の内部のようだ。

真白いエナメル塗の椅子がいくつも並んだ清潔至極な理髪室がある。

大きい大きいニッケル湯沸しの横に愛嬌のいい小母さんが立つて一杯三哥（三錢）のお茶をのませ、菓子などを売る喫茶部は殷やかな話し声笑い声に満ちている。

体育室の設備のよさは、プロレタリア・スポーツの誇りだ。

医務室がある。

法律相談所がある。

ゴルロフカの母親たちの便利も決して見落されてはいない。「母と子の室」。

あらゆる明るい部屋部屋にゴルロフカの炭坑労働者の男女の姿がある。どの廊下にも愉快そうに働いているゴルロフカの連中がいる。

「労働宮」は三百万ルーブル（円）で建てられた。その当時ソヴェト同盟の石炭総生産は世界第六位でありドン・バス炭坑区はその大部分を生産していた。

来る十一月七日革命第十五周年記念日こそ世界の全勤労階級のよろこびと新たな決意の日だ。ソヴェト同盟のプロレタリア・農民は第一次五ヵ年計画を達成し、社会主義社会建設への勝利と可能とを身をもつて示した。ソヴェト同盟の全生産はヨーロッパ戦争前（一九一三年）の二倍に高まつた。ソヴェト同盟は世界第二位の生産と国民所得をもつ国となつた。労働時間は八時間から七時間になつた。失業は根絶され、労働者の平均賃銀は二倍強に上つてゐる。ひきつづいて一九三七年までに行われる第二次五ヵ年計画で、ソヴェト同盟の労働者農民は更に社会主義の社会を完全なものとし、この世界に階級のない社会を建設しようとしている。ゴルコフカ炭坑区「労働宮」のラジオ拡声機をとおしてこの日モスクワの「赤い広場」から叫ばれるスターリンの激励演説とそれに応える数百万の勤労者の歓呼の声が轟くであろう。

諸君。われわれにもその確信と闘争に満ちたソヴェト同盟のプロレタリアの叫びが聽えるようではないか。よしゴルコフカ「労働宮」はまだわれわれのところに無いにしろ、帝国主義列強の侵略に対してもソヴェト同盟の革命的な労働者農民を支持し、社会主義社会の建設を防衛するものこそわれわれである。支持と協力と自身の解放を誓うわれらの叫びを

送ろう。

モスクワへ！

ドニエプルストロイへ！

トウルクシズヘ！

そしてシベリア、極東地方へ！

〔一九三三年十一月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第九卷」新日本出版社

1980（昭和55）年9月20日初版発行
1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本「宮本百合子全集 第六卷」河出書房

1952（昭和27）年12月発行

初出：「大衆の友」

1932（昭和7）年11月号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2002年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ドン・バス炭坑区の「労働宮」

——ソヴェト同盟の労働者はどんな文化設備をもっているか——

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 宮本百合子

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>